

## 5. ステップ☆アップ！！

敦賀市立栗野小学校

6年 上下 夕佳 上原 菫

↓

各務原市立鵜沼第二小学校

6年 青山 沙梨菜 加藤 きずな 河尻 真優

田川 香澄 鴻巣 里帆

私は中学三年生の川宮日向。

私には、とても仲のよい友達がいる。

「ユッキー」

「おはよう、日向」

とても元気な女の子です。名前は谷村ゆきな。私は、ユッキーと呼んでいます。

キーンコーンカーンコーン。

「ユッキー、いっしょに帰ろう」

「……」

あれ、どうしたんだろう。私、何かユッキーにいやなことしたっけ。私は、なやみになやんだ。その結果、もしかして、休み時間に私がユッキーのノートに落書きしたからかな。でも、その時はユッキーも笑っていたなあ。まあ、とりあえず明日あやまってみよう。

～翌朝～

「ユッキー、おっはー」

「……」

やっぱりおこってるか。

「あのね、昨日はごめん。勝手にノートに落書きしちゃって。本当にごめん」

「えっ」

「えっ、て何。私、あやまってるんだけど」

「そうじゃなくて。私、そんなふうに思われてたんだ。こっちこそごめん。私、おこってるんじゃないって、お母さんとけんかしちゃって」

「そうだったんだ。よかったあ。てっきり私におこってるのかと思ったよ」

「それじゃあ、今日はいっしょに帰ろうね」

「うん」

ユッキーと日向は、帰りにかんちがいの話で盛り上がっていた。

「ユッキーと呼んでも返事をしてくれないから、てっきりおこっているのかと思った」

「そんな。私がノートに落書きしただけでおこると思う？」

「そうだね」

二人は、そんな話をしながら帰って行った。家に着いたら、ユッキーからメールが届

いていた。見てみると、

「ねえ、明日ひまだしどこか行かない？」

というメールだった。あっ、そうだ。明日は土曜日だったんだ。

日向は、すぐにメールを返した。

「うん、私もひまだし」

すると、すぐユッキーから返信がきた。

「じゃあ、どこへ行く。私はデパートで服とか見たいな」

へえ、ユッキーは洋服に興味があるんだ。

「私も最近行ってないから行きたい」

「よし、明日はデパートで待ち合わせ」

やったー。久しぶりにユッキーとデパートでお買い物。楽しみだなあ。早く明日になってほしいよ。

～翌日～

日向は、朝から出かける準備で忙しかった。

「あっ、もう行かないと。行ってきます」

ユッキーとは十一時に待ち合わせをしている。

「ユッキー、お待たせ」

ユッキーはおしゃれな服装をしていたので、すぐに分かった。

「うん。私もさっき来たばかりなんだ」

学校で見るユッキーとは少しちがっていたので、私は思わず見とれてしまった。

「おうい、日向」

おっとあぶない。ユッキーに見とれすぎて、自分の世界に入ってしまった。ユッキーの洋服、なんてかわいいんだろう。私もおしゃれな服がほしいな。あっ、そうだ。ユッキーに、似合う服を選んでもらおう。

「日向、こっちにかわいい服あるよ」

「あっ、ほんとだ。かわいい」

私に似合う服ってどんなんだろう。ユッキーに聞いてみようかな。

「ねえ、ユッキー。私に似合う服ってどんなんだと思う？」

ユッキーは、ちょっとなやんでから答えた。

「そうだな。日向はかわいい系が似合うと思うよ。美人だし」

そうか、かわいい系なのか。かわいい系っていうのは、ミニスカートとかワンピースとかかな。

「ユッキー、私に似合う服選んでくれる」

私、センスないんだよね。でも、そんなことは言えなかった。

「うん、いいよ。どんなのがいいかな」

ユッキーは、私に服をあてたりした。

「日向、こんなのどう」

ユッキーが差し出したのは、ピンクの水玉もようのワンピース。

「あっ、かわいい。これにしようかな」

「うん、それにしなよ。日向なら絶対に似合うと思うよ」

私はユッキーに決めてもらった服を買った。

ユッキー、選んでくれてありがとう。★

すると、ユッキーが私に、

「ねえ、日向。あたしの服選んで。こんなにかわいい服があって迷っちゃうから。ねっ、お願い」

私は断りたくても断れずユッキーに、

「いいよ」

と言ってしまった。私の心の中では、

(こんなにセンスがいいユッキーの服を選ぶのは、センスのない私には無理)

でも、ユッキーに似合う服をさがした。私は元気な服を選んだ。私が選んだのは、長いチュニックに、うすいピンクのショートパンツ。それをユッキーに着てみてもらうことにした。すると、ユッキーが、

「日向……、これ……、すごいあたし好みの服。センスいいじゃん」

「本当に」

私はうれしくて飛びはねた。するとユッキーが、

「ちょっと日向、そんなにはねたら……」

ドタン。

「いたい」

と私は言った。

「あはははは」

周りの人も私を見て笑った。

「バカだな」

と小さな声で言った人がいたので、泣きそうになった私を、

「笑わないでください」

とユッキーが強く言って立たせてくれた。

「あんな人、ほおっておけばいいの」

とはげましてくれた。

「ありがとね、ユッキー」

私は泣きながら、何回も何回もユッキーにそう言った。

「あっ、そうだ日向。せっかくかわいい服を買ったんだし、このあと私の家で着せ替えしてみない」

「わあ、それってすごく楽しみ」

私は胸がドキドキした。

ユッキーの家に着くと、ユッキーの部屋で着せ替えをした。私はユッキーの選んだ服を着てみた。

「わあ、かわいい。すっごく似合っているよ」

「ありがとう。ユッキーのおかげだよ」

次は、私が選んだ服をユッキーが着た。

「わあ、うれしい。日向、センスいいね」

「本当、うれしい」

着せ替えて私たちは盛り上がった。

「ねえねえ、次は、今着ている服に合うアクセサリーなどを重ねてみない」

「いいかも。賛成。ユッキーはいろいろなアイデアを思いつくんだね」

「そんなことないよ」

とユッキーは少し照れていた。

二人でキャッキョとさわいでいたら、あっという間に時間が過ぎていた。

チャラーン。

ユッキーの家の時計が六時をさした。

「あっ、もう帰らないと。私の家では六時半が門限だ」

「そっか。じゃあまたね」

「ばいばい」

私は門限に間に合うように走って帰った。

その夜。

ベッドにもぐりこんだ私は、なかなか寝付けなかった。ユッキーの「センスいいじゃん」という言葉と、喜んでいる顔が頭から離れなかった。

私はふと将来のことが頭に浮かんだ。私はまだ将来の夢が決まっていない。だから…。

「服のデザイナーっていいかも」

私はベッドから起き上がった。

そして、自分がデザイナーになったときのことを考えていたら、いつの間にか眠ってしまった。

月曜日。

「ユッキー、おはよう」

「あっ、日向、おはよう」

「……ユッキー」

「日向どうしたの。そんな真剣な顔して。顔が赤いよ」

「あ、あのね、私、将来、服のデザイナーになろうと思うの」

「……」

ユッキーはびっくりしていた。

「やっぱり、私がデザイナーって変？」

「……私はね、スタイリストになりたいんだ」

「ユッキー、絶対になれるよ。この前のデパートでも私にすごくかわいい服を着せてくれたじゃん」

「そう、ありがとう、日向。私がんばってみるね」

「じゃあ、ユッキーって高校もそういう所に行くの」

「一応ね。日向はどう」

「私はきのう決めただけだから、よく考えてない」

「そうなんだ」

「今日もいっしょに帰ろうね」

「オッケー」

二人は仲良く教室へ入って行った。

「さっきの話だけど、『M学園』というスタイリストとかデザイナー専門の学校なんだけど。私……、学校を何回も休んじゃったし、頭悪いから受からないかも……」

「ユッキー、大丈夫だってえ。私なんてテストで一桁の点数取っちゃったし……。絶対受かって、将来の夢をかなえよう」

「うん。絶対受かろうね、日向」

そう言って私たちは約束した。

そして、私とユッキーは受験に合格した。

——数十年後。

学校を卒業して、私は夢をかなえ、服のデザイナーになった。それに日本のこの業界の頂点、つまりトップに立っている。

ユッキーもスタイリストになった。彼女もこの日本の業界のトップ。

今の私とユッキーは、友達でもあり、ライバルでもある。

こうして私とユッキーは、きらきらした中学三年生の約束を果たすことができた。